

一 一 月 例 会 要 旨

講演 M301教室

特集

第三回 国際研究集会

坂 井 セシル

運営委員会

立教大学で開催される第三回国際研究集会では、個人発表・パネル発表のみではなく、プログラムの最後に全体が集まる企画として講演会を設けました。第一会場のM301教室において、坂井セシル氏の講演があります。会員で評議員の坂井セシル氏は、パリディロク大学教授で、現在、日仏会館フランス事務所日本研究センター所長として、拠点を日本に移して研究されています。二〇一四年にパリで開催された国際シンポジウム「川端康成21世紀再読 モダンイズム、ジャポニズム、神話を超えて」において中心的役割を果たされ、その成果は、昨年末『川端康成スタデー

ズ：21世紀に読み継ぐために』（坂井セシル、紅野謙介、十重田裕一、マイケル・ポーター、シユ、和田博文編、二〇一六・一二、笠間書院）として刊行されました。国際研究集会は、日本近代文学会という研究場を、世界各地で積み重ねられている（日本近代文学）に関わる研究活動とダイレクトに接続させる会です。個人発表・パネル発表はもちろんのこと、フランスで日本文学を長く研究してこられた坂井セシル氏の講演会にも、ぜひご参加ください。

日本文学の研究は他の研究領域と同様に、変化しながら近代の道を歩んできた。文芸から文学へ、国文学から日本文学、そして日本語文学へ、と名称が変わるだけではなく、その内容、評価、批評方法、また、文化一般、あるいはより広く、社会におけるその価値までが変遷してきた。

近年の一つのキーワードが国際化で、国内の場と、海外の場との相互作用が、グローバル化という越境的な正当性という効果を生み出している。ここでは、フランスの例を以て、歴史的背景、日仏文学場の動向と相互関係、翻訳の意味、そして日本文学を受容、つまり読者の問題も考慮に入れる。「文学の終焉」とも形容された危機感のアポリアをどのように克服出来るか考えたい。

なお、個人発表・パネル発表の要旨は、本学会のHPに掲載されています。